令和4年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部　県知事賞　優秀賞

「　祖父と母の経験から　」

鹿児島県　屋久島町立岳南中学校　１年　池田（いけだ）　来未（くるみ）

鹿児島県は全国でも土砂災害の被害が起きやすい。鹿児島県の土じょうは火山灰堆積のシラス台地で水を含みやすく、モルタル状になった柔らかな土が土砂災害を引き起こすのだ。

私自身は土砂災害にあったことはないが、私の祖父と母は被災経験者だ。

祖父は鹿児島県蒲生町の出身で、高校生になるまで蒲生町の山間にある家に住んでいた。高校１年生の夏、祖父は夏休みで帰省していた兄２人と両親と久しぶりの家族団らんを過ごした。翌日は朝から雨が降り続き、いつまでも降り止まない長雨に祖父が不安を感じていたところ突然「ドン！」という大きな音がして裏山が崩れ山の段差のところで、土砂が止まった。突然のことにおどろいていると、もう１度ごう音と共に土砂が流れ始めた。２度目の土砂くずれで危険を感じた祖父は教科書だけをかばんに詰め込んで両親と兄と一緒に逃げ出した。

家から 100 メートルほど離れた山の中腹から振り返ると、３度目の土砂くずれで大きな木や竹が直立したまま、母屋を巻き込みながら山肌を滑り落ちていったのをはっきりと覚えていると言っていた。

その日は被害の詳細状況も分からず、かろうじて残っていた馬屋に戻りわらの中で一夜を過ごした。次の日の朝、前日に逃げ出した場所に行き改めて家の方を見てみると、母屋のあった場所からはば 100～150 メートル、高さ 50～60 メートル程がくずれてシラス台地の山肌が剥き出しになっていた。

高校生だった祖父は被災した日から１年半ほどを避難所で過ごしたそうだ。50 年が経った今でも当時のことは鮮明に覚えていると詳細を話してくれた。

また私の母は横浜の出身だが、鹿児島の曽祖父母宅へ訪れていた時に土砂災害にそう遇した。母も祖父と同じように当時のことは今も忘れられない記憶として残っているらしい。

母が被災したのは中学１年生の夏休み、８月１日のこと。午前中は晴れていたのに夕方から激しい雨になり、雨の音に不安を感じて眠れなかった母が外を見に行くと、母家の隣にある馬屋の床に３センチ位の水が貯まっているのを見て曽祖母を起こした。５分ほどで土間に戻ると水は玄関の段差を乗り越えて土間まで浸水していた。鹿児島に住んでいる曽祖母も経験したことのない水の状況に驚いている間にみるみる土間の水位は深さを増して、気がついた時には 70 センチ程の高さの土間は水で埋まり、あっという間に部屋に浸水した。母は母の妹と従姉妹と一緒に曽祖父母宅に泊まっていたが、年下の２人は浸水当時寝ており、部屋に浸水した瞬間の「水が来たぞ！」の曽祖父の呼び声で飛び起きて間一髪で助かったそうだ。被災した母は雨の降り続く真夜中に懐中電灯の灯りだけを頼りに曽祖父宅から 100 メートル程先にあった曽祖父の弟の家に避難して一夜を明かした。だく流で道も見えない真っ暗な中、農業用のくわが流れてきて母の足に引っかかり、危うく転びそうになった時は本当に命の危険を感じたと話していた。

祖父も母も幸いに命を失わずにすんだが、２人の話を聞いて土砂災害の際には一瞬の判断が生死を分けるのだと思った。

初めにも話したが、私自身は土砂災害を経験したことはなく、横浜では遠い世界の話だった土砂災害が、屋久島に来てからはとても身近にある災害だと感じるようになった。横浜と屋久島は驚くほど降水量に差があり、「１ヶ月で 35 日雨が降る」というほど降水量の多い屋久島では、自然災害の中で最も深刻な災害は土砂災害だと思う。実際に 2019 年の５月には記録的な大雨による土砂災害で、登山者を含めて 300 人を超える人たちが山中に孤立するという被害もあった。この時には人的被害はなかったが、一歩間違えれば多くの命が失われていたかもしれないと考えると、土砂災害はとても恐ろしいものだと思う。

屋久島では土砂災害を防ぐために砂防ダムや崖崩れ対策などの施設が造られており、土砂災害の起こる危険のある場所を知るための防災マップが作られるなど身を守るための知識を得ることができる。

自然の力を前に私たちにできることは多くないかもしれないけれど、自分や家族の命を守るためにできる限り備えておくことが重要だと強く感じた。また今回聞いた話を心に留めておきたいと思った。